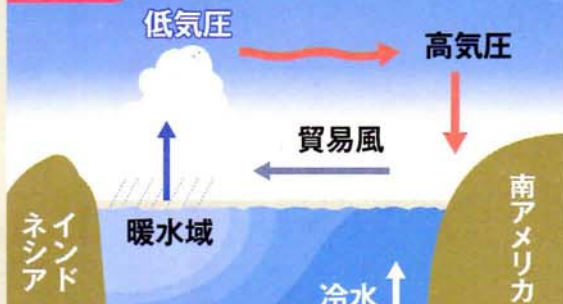


ラニーニャ現象とは何か

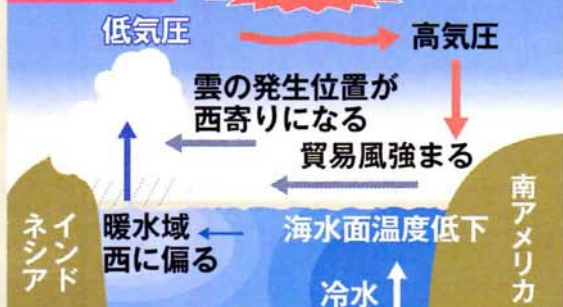
平常時



東風(貿易風)が吹き、海水温はインドネシア近海で高温、ペルー沖は低温になっている。気圧配置は西低東高。積乱雲をつくる上昇気流はインドネシア近海で発生する。

ラニーニャ

現在発生中!



貿易風が強くなり、インドネシア近海の海水温が平年より高温、ペルー沖は低温になる。上昇気流の発生場所がインドネシアに近くなるため、降水量が多くなる。日本では暑夏・寒冬となる傾向がある。

ラニーニャ現象で冬が寒くなるメカニズム



映画「デイ・アフター・トゥモロー」

▲世界的な異常気象で、自由の女神が凍りつく世界を描いた

ラ

ニーニャ現象とは
南米沿岸から太平洋赤道域の日付変更線付近までの海面水温が平年よりも低くなること。現在、ペルー沖で発生が観測されている。ラニーニャ現象は、北半球に厳寒をもたらすこと知られる。

「平時より強い東風(貿易風)に押されて、暖かい海水が西に偏るため、

インドネシア近海で海水や大気の対流が高くなり、その結果、インドネシア近海で積乱雲が発生しやすくなり、その雲から噴き出した気流は北半球と南半球に流れていきます」(前出・古川氏)

北へ向かった気流は偏西風を蛇行させる。日本付近で偏西風が南に蛇行すると、大陸からの寒気が日本に流れやすくなる

北半球に厳冬をもたらすラニーニャ現象

のだ(左図参照)。

「ただ、このラニーニャ現象は、今回、冬の途中で終わるとも言われています。そうすると、北の寒気が引込み、逆に日本の南側の南岸低気圧が近づいてくる。つまり、冬の始まりは日本海側、冬の終わりから春先にかけては関東や首都圏で大雪が降る可能性があるのです」(前出・森氏)

2021年1月の「爆弾低気圧」



(前出・古川氏)
爆弾低気圧が到来する可能性も否定できません」

爆弾低気圧もやってくる

'21

年1月に新潟県上越市高田で24時間の降雪量が観測史上最高となる103cmもの豪雪をもたらしたのは「爆弾低気圧」だった。

「これは24時間で急激に気圧が下がる温帯低気圧のこと、暴風や大雪をもたらすことがあります。このままラニーニャ現象が続けば、年明けに爆弾低気圧が到来する可能性も否定できません」